

天安門事件から『08憲章』へ

中国の漸進的改革の可能性を示す



劉曉波 著 劉燕子 編

藤原書店・三七八〇円

六・四「血の日曜日」事件から二十
年を経た時点で編まれた本書は、決して忘却の彼方に消し去ってはならない中国の悲劇が、現在の中国においてもなお継続中であり、形を変えて進行しつつあることを切実に表現し、訴えている。中国の若き詩人・文芸批評家として期待されていた劉曉波は、米国滞在中に中国民主化運動の再高揚に誘われて帰国し、天安門広場のハリストに加わるのだが、あの天安門事件の惨劇の現場証人として学生たちを轢き殺し打ち殺した人民解放軍戒厳部隊の戦車と装甲車による凶暴残忍を絶対に許容し得ないばかりか、それらの死者の犠牲のうえに自らの生と現存があること

を自己告発せずにはいられない。

劉曉波は「国家政権転覆扇動罪容疑」で今日も再び獄中であって、自ら提唱者の一人であり、一万人近くもの署名者の一人でもある中国民主化への画期的な宣言「08憲章」(二〇〇八年十二月十日発表、本書に全文収録)にも直接かかわれない境遇にある。しかし、劉曉波は中国の将来に希望を棄ててはいない。当局の規制や弾圧がいかに厳しくても、中国共産党の苛酷な一党独裁下であっても、「民間」の力が様々な社会的レヴェルや組織で広がりつつあり、とくにインターネットが中国に入ってからには、「これを技術的に封鎖することは難しく、中国人が言論

の自由を獲得するのに未だかつてないプラットフォームを提供し、ますます多くの勇敢な人々が、インターネットを通して自由な発言を行い、暴政に反抗するインターネットの民意を形成し、言論統制の「穴だらけ」状態は、もはや修復する方法もない」と述べている(本書一六七頁)。

本書所収の論文「文化大革命から天安門事件まで——中国民主化の挫折」では、中国の災禍は「毛沢東時代にはピークに達した」がゆえに毛沢東の死と文革の終息は、中国の民主化には大きなチャンスであったという。それなのに毛沢東時代には批判され失脚していた鄧小平が、一九八七年の中国共産

党第十三回大会で中国の民主化への歴史的な報告を行った趙紫陽とは完全に異なる頑迷派となつて、大規模な殺戮の張本人になつてしまつたのはなぜなのかについて、劉曉波の見解を聞くことができる日が一日も早く来てほしいものである。

本書は、劉曉波という現代中国のすぐれた知性の発言や作品を日本に留学された劉燕子さんを中心に編集した著作であり、中国の将来には漸進的な改革への期待がもてることを示したという点でも意味深いものがある。

人権や民主という貴重な価値は、中国社会を含む人類全体に共通な行動規範なのであって、そのことを尺度に中国の体制を非難することは、決して「中国パッシング」などではないことを、劉曉波は今日も獄中で訴えているように思われる。

国際教養大学学長 中嶋嶺雄

「外国人参政権」で日本がなくなる日

別冊宝島編

宝島社・五八〇円



外国人参政権問題の肝をコンパクトにまとめたブックレット。田母神俊雄、百地章、金美齡、石平、鄭大均といった識者がさまざまな角度からこの問題に斬り込んでゆく。さらにポイントを押さえた関連資料が理解を助ける。価格も安く勉強会の資料として最適だ。

同書編集部は問題点として①中国の侵略を合法的に許すことになる②日本のアイデンティティが失われる③永住外国人も幸せになれないの三点を挙げ、それに基づいて書かれたフィクション「人口173人の村青ヶ島に外国人参政権が成立したら…!？」は背筋の凍るようなわが国の明日が描かれており、必読である。

ん

山口謠司著

新潮新書・七二四円



サブタイトルに、「日本語最後の謎に挑む」とある。その謎が「ん」だという。たかが「ん」ではないかと、侮ってはならない。

恥ずかしながら本書を読んで初めて気づいたのだが、「ん」は母音でも子音でもない。清音でも濁音でもない。最古の歴史書「古事記」には「ん」の表記がなく、五十音図の枠外に置かれている。と、すると「ん」とはいったい何なのか。

そんな疑問を、「ん」にまつわる様々なエピソードとともに興味深く解き明かしたのが本書だ。意外なことに、あの空海も本居宣長も「ん」を究めようとしたとか。んーっ、奥深い。

正論



FUJISAKEI
COMMUNICATIONS
GROUP
Opinion
Magazine

SEIRON 5
2010

昭和49年5月2日第3種郵便物認可平成22年5月1日発行・発売
(毎月1日発行・発売)通巻第458号 産経新聞社

総力特集

民主党よ、どこまで 日本を壊したいのか

外国人参政権、夫婦別姓、人権侵害救済
国家解体の策動を許してはならない

高市早苗／長尾一紘／長尾敬
近藤将勝／菅原慎太郎

国民を誑かす「新しい公共」という論理
「保守」の正念場に我らが闘いの決意

八木秀次

平沼赳夫

古屋圭司

パッシング 樹撃の真相

トヨタは本当に過ちを犯したのか
大野和基